

昆虫の世界

夏から秋へ ①

小島 賢司

私が豊島園で昆虫館の仕事をするようになって8年になる。子供の頃から昆虫に親しみ、昆虫について少しは知っていたが、仕事で採集や飼育をするようになって、より深く、昆虫を理解するようになった。とはいえ、昆虫の世界はあまりにも広く、まだまだ判らないことのほうが多いのだが……。

ご存じのように、日本には四季があり、季節の移り変わりに合わせて、自然は装いを変えていく。昆虫の世界も同じで、四季折り折り見られる昆虫の種類は変わっていく。この、季節の変化を巧みに利用して、昆虫たちは暮らしている。夏の雑木林の王様、カブトムシや、盛んに鳴いていたセミたちは、今、どうしているのだろうか。秋を盛りと鳴く虫たちの世界はどうなっているのだろうか。これから、ちょっと紹介してみたい。

子供たちの昆虫に対する関心が高まるのは、なんといっても夏である。夏には、子供たちに人気のあ

る、カブトムシやクワガタが見られるからだ。昆虫館の事務所は、「昆虫なんでも相談室」を兼ねており、夏には、子供や親子連れの質問者がたくさん訪れる。質問の内容はカブトムシ、クワガタについてが圧倒的に多い。採りたいけれど、採り方がわからない。どこへいけば採れるのかわからない。飼い方がわからない等である。都会の子供たちは、昆虫の知識は豊富なようだが、実践が伴っていないようだ。また、若い親たちも虫採りをせずに育った人が多くなってきて、子供に教えられないようである。

私が子供の頃、虫たちは良い遊び相手だった。空箱を持って街はずれの雑木林へ行けば、カブトムシやクワガタは箱一杯採れた。リングゴ箱に網を張った飼育箱を作り、中で飼ったり取り出して遊んだりした。オス同士向かい合わせて相撲を取らせたり、マッチ箱で車を作って引っ張らせたりして遊んだ。三十年も前の話だが、その頃の体験があるので、今でもいそうな場所はすぐ判る。小学生の息子がカブト

ムシを採りたいと言えば、一緒に採りに出掛ける。虫採りの時だけ、息子は私に敬意を表してくれる。

カブトムシは、夏の雑木林を代表する昆虫である。クヌギやコナラの木の樹液を吸いに集まってくる。オスには立派な角があり、戦いの道具になる。オス同士が出合うと、角を突き合わせて戦い、相手をほうり投げた方が勝ちとなる。勝ったオスは餌場を独占し、やってきたメスと交尾をする。しばらくすると、メスは土の中に卵を産み始める。卵は1粒ずつ、土を固めた小さな丸い部屋に産み込まれるが、自分の卵を大切に扱う母親の心遣いが感じられる。卵は最初、長径3mm程の米粒状をしているが、土中の水分を吸収し、孵化間近になると、直径4mm程の球形になる。孵化した幼虫は、腐植土を食べて成長し、秋の終わり頃までに、2回脱皮して三令幼虫になる。秋に、質の良い餌をたくさん食べてどれだけ大きくなれるかで、成虫の大きさにも差が出るようだ。幼虫にとって良い餌とは、農家で作る堆肥

のように、落葉をたくさん積んで腐らせたものである。堆肥の中は秋でも発酵熱でとても温かいので、幼虫はほとんど育つ。これに対し、立ち枯れや切り株に入った幼虫は、餌が乾燥していたりすると大きく育たないことがある。やがて、冬が来ると幼虫の動きは鈍くなるが、少しは餌を食べているようだ。

春が来て暖かくなると、また活発に食べ始め、六月頃、土の中に蛹室を作って蛹になる。二〜三週間経つと、蛹から羽化し、カブトムシになる。一週間程度蛹室に留まった後、地上へ出て活動を始める。カブトムシは、一年で一を送る訳である。

クワガタの仲間は生活が多様化していて一概には言えないが、夏が終わるとすべて死んでしまうノコギリクワガタやミヤマクワガタと、オオクワガタ、ヒラタクワガタ、コクワガタのように、一部のものが成虫で冬越しするものがある。コクワガタのメスは、夏の間には適当な朽ち木を見つけ卵を産む時、メスは短いキバのような口で朽ち木をかじり取り、



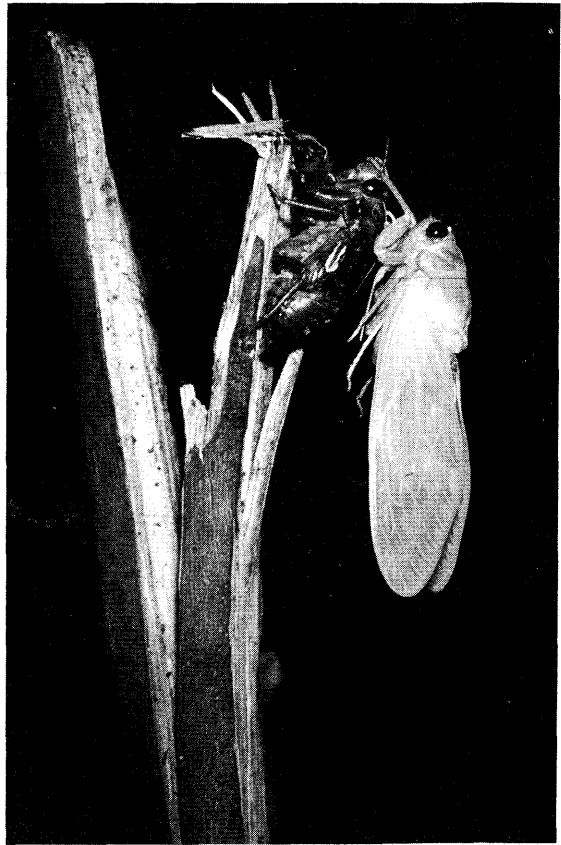
▲カブトムシの幼虫



▼コクワガタの幼虫

そこに、卵を一粒産み込むと、その穴に木屑を詰めて埋め戻す。このようにして、ねいに卵を産んで行くので、産卵数はあまり多く無いようだ。卵は二〜三週間で孵化し、一令幼虫は、周りの朽ち木を食べ始める。少しずつ食べ進んで行くので、食べた後が木屑やフンの詰まったトンネルのようになる。これを虫屋（昆虫

を研究、採集する人種）は坑道と呼び、クワガタの幼虫を探す時の手掛かりにする。朽ち木を崩してクワガタを探す場合、坑道をみつめて、それをたどっていけば幼虫がみつかる。時には、蛹や成虫が出てくることもある。秋の内に一回目の脱皮をして二令幼虫になり、最初の冬を越す。冬の間は坑道の中で



▲羽化して羽をのぼすアブラゼミ

じっとして過ごし、春からまた朽ち木を食べ始め、やがて三令幼虫になる。朽ち木の中にカプセル型の蛹室を作って蛹になり、二〜三週間経つと成虫になる。しばらくすると体は堅くなるが、外に出て活動しようとはしない。蛹室の中で二度目の冬を越し、五〜六月頃、やっと朽ち木から出て活動を始める。

成長の遅れたものは二度目の冬も幼虫のまま過ごし、三年目の初夏に蛹から成虫になり、すぐに活動を始めるものもある。このように、コクワガタは卵から成虫になるまでに二〜三年かかる。クワガタの仲間は幼虫の育つ環境によって、成虫になるまでに四〜五年かかるものもある。

これよりもっと時間をかけて成長するのがセミの仲間である。セミは短命で一〜二週間の寿命と言われ、命のはかなさを感じさせるが、それは、成虫についてのみ言えることで、その一生は昆虫の中では長い部類に入る。アブラゼミは真夏に出現し、オスは「ジリジリジリ」と暑さを増長させるような鳴き方をする。鳴き声に誘われてやってきたメスと交尾が行われ、交尾を終えたメスは枯れ枝に卵を産み込む。大切な役目を終えたセミは死んでしまうが、産み付けられた卵はそのまま冬を越す。六月の梅雨の頃、卵からかえった幼虫は地面に落ち、土の中に潜って木の根に取り付く。幼虫の口は針のようになっ

ていて、それを根に突き刺し、樹液を吸い始める。ここから長い土中生活が始まる。木の根から樹液を吸って徐々に成長し、四回脱皮して五令幼虫になるまでには、五年もの長い時間を必要とする。夏の夜、地面に穴をあけ、地上に這い出した幼虫は、羽化場所を探し歩き、適当な木の幹や葉をみつめて静止する。やがて幼虫の背中が割れ、中から真っ白なセミが出て来る。数年前、家で家族と、息子の友達、その母親を招いて、セミの羽化を観察したことがある。皆一様に感動していたが、友達の子の母親が一番興奮していたのを覚えている。大人にも、セミが誕生するシーンは、深い感動を与えるようだ。アブラゼミは、卵から成虫になるまで七年かかるが、他のセミの生活は、まだわかっていないものが多い。

つづく

(豊島園昆虫館)